

コンストラクティヴィズムと歴史研究 接点あるいは親和性

篠原 初枝[†]

Constructivism, History and Common Context

Hatsue Shinohara

This work aims to probe the nature of constructivism in comparison with studies in history. In the current scholarship of theoretical studies of International Relations constructivism claims to investigate such factors as culture, identity, and ideas which have been neglected by the previous approaches of realism and liberalism. The traditional argument stresses on the notion of power and structure which regards material elements as essential and important. Constructivists, however, argue that while material factors are important, actors in international relations also develop their identity and define their relationships through "socialization." It is important to note that the process of socialization does not happen instantly. Rather it takes an evolutionary process in which the contextual framework of time matters. Accepting the notion of time as essential and indispensable, constructivists operate in a similar analytical mode as historians. In addition, while elaborating conceptual frameworks, constructivists have produced empirical studies in which the significance of history and historical approach are acknowledged. On the other hand, historians on their part have produced works which examined the role that ideas play in international relations. By emphasizing image, national attitude, and role models, studies in international history have established a rich tradition in investigating "ideational" aspects well before theorists presented the concept. Thus, the examination of theoretical foundations in constructivism and works that applied them, and the survey of historical studies that address the similar questions, reveal that constructivism has "pro-historical" orientation in its endeavor.

はじめに

近年国際政治学の理論研究において、コンストラクティヴィズム（構成主義）の議論が盛んである¹。コンストラクティヴィズムについては、果たして、これが国際政治学理論において、リアリズム、リベラリズムに続く第3の柱となりうるのか、あるいは、理論というよりもひとつのアプローチにすぎないなどと議論がなされている²。国際関係史を専門にする筆者には、このコンストラクティヴィズムについては、全く新しい視点を提示するというよりは、むしろ慣れ親しんでいた歴史研究のアプローチを思わせるものであった。コンストラクティヴィズムは既に所与のアプローチに重なる点があるのではないかという疑問を抱いたのである。

これまでも、国際関係の理論研究と歴史研究（外交史あるいは国際関係史）について、学問的な接点

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

を採る試みが全くなかったわけではない。理論と歴史は、何が異なるのか、あるいは学問的な協調の可能性はあるのかなどについて、関心が払われており、たとえば、『インターナショナル・セキュリティ』誌は、1997年に理論と歴史についての特集をおこなっている³。また、歴史研究者の側からも、アメリカ外交史学会が学界の現況にまとめた書物にも、理論についての1章が設けられており、アメリカ外交を歴史的に探求する際には、「安全保障」、「イデオロギー」などの項目と並んで、「理論」をも無視できないという認識が表れている。同書においては、ホルスティはミクロレベルでの議論において、政策決定モデルなどは歴史研究にも多く用いられてきたと指摘している。さらには、「歴史研究者が理論を用いて、理論の利点と限界を批判的に示すことができるならば、理論研究者は自己のモデルの有効性について多くを学ぶことができる」と書き、歴史研究が理論の妥当性を検討するという関係を示唆している⁴。

加えて、歴史家が理論を批判的に検証する場合もあり、外交史家シュレーダーは、ネオリアリズムの妥当性を歴史的事例に即して検討している。シュレーダーは、国家はネオリアリズムが主張したように、大国に対抗して勢力を結集するわけではなく、国家はそれぞれ得意な機能を有し「専門化」することを歴史的に論証し、ネオリアリズムは「非歴史的 (nonhistorical)」、「反歴史的 (anti-historical)」と結論づけた⁵。では、コンストラクティヴィズムは、同じように、「非歴史的」、「反歴史的」という評価を下すことができるのであろうか。

『インターナショナル・セキュリティ』誌の理論と歴史についての特集や、ホルスティの文献においても、コンストラクティヴィズムは触れられ紹介されているが⁶、コンストラクティヴィズムについて歴史研究者が分析を試みたものは、筆者が散見する限りないようにも思われる。本稿の目的は、歴史研究と国際政治学理論としてのコンストラクティヴィズムとの間に、接点あるいは親和性があるかを探ることである。このような作業の結果、理論としてのコンストラクティヴィズムが有する特性の一面が少しでも浮き上がり、また、理論と歴史研究の関係について考える一助となれば幸いである。議論の道筋としては、まずコンストラクティヴィズムの理論型に、実証研究、歴史研究との親和性を含む部分があるのかを検討し、さらには、既存の歴史研究において、コンストラクティヴィズムと重なる視点を提起しているものを考察する。

1. コンストラクティヴィズムにおける歴史要因

コンストラクティヴィズムについて未だ確定した評価は定まっていないとしても、これが新しいアプローチであり、少なくとも、文化、アイデンティティ、思想などの要因を国際関係に取り入れて既存の理論型が見逃してきたことを射程に入れているという評価はされている⁷。この節では、手始めにコンストラクティヴィズムの理論型を検討し、その中に果たして、歴史研究との接点があるか分析し、さらには、コンストラクティヴィズムの枠組からなされた実証研究を検討する。

まずは、従来の国際政治学理論、主としてアメリカにおける理論研究の分野で支配的といわれてきたウォルツのネオリアリズムとの差異からコンストラクティヴィズムの特質を考える。コンストラクティヴィズムの代表的論者といわれるウェントが、自らの理論構築をウォルツ理論の批判的継承と位置付けていることから、このような視角は妥当であろう。筆者は、1. 方法論、2. 国際関係を動かす仕組み、

3, 国家の性質, 4, 国益の形成, 5. 国家と構造 (structure) との関係から, ネオリアリズムとコンストラクティヴィズムを検討する。

まず, コンストラクティヴィズムの台頭は方法論上の論争として位置付けられている⁸。すなわち, ネオリアリズムのみならずリベラリズムも含めてこれまでの国際政治学理論が, 国際関係の仕組みを客観的に把握しようという前提に立って議論を展開してきた (客観主義) のに対し, コンストラクティヴィズムは主観主義を前提としているとされている。コンストラクティヴィズムにおいて「間主観性 (intersubjectivity)」, つまりアクターがどのように自らを定義付けるのか, あるいは国際関係の規範をどのように理解するかといった主観的要因が重要な概念となっている。

このように, 客観主義か主観主義かという理論によってたつ世界観が異なるのは, 国際関係を動かしている仕組みについての理解が異なるからである。客観主義的国际政治理論にとっては物質的な要因 (軍事力, 経済力など) が重視されるのに対し, コンストラクティヴィズムでは「ideational」⁹ な要因もまた重要だと説かれる。ウェントによれば, 国家の「ideational」な位置付けもまた, 国際関係を規定する要因なのである。コンストラクティヴィズムは, 物質的な要因, たとえばウォルツによる「パワーの不均等な分配」を全く無視するわけではないが, 「間主観的」な要素もまた重要だと説く。たとえば, ウェントは以下の例を挙げる。「友の手にある銃は敵の手にある銃とは異なる。この場合, 敵意は物質的な関係ではなく, 社会的関係である」。ウェントによるならば, そのような主観的要因は「信念 (belief), 理念 (ideas), 理解 (understandings), 認識 (perceptions), アイデンティティ」からなる文化的構造を作り上げる。¹⁰

次には国家をどのように定義するかが問題となる。ウォルツは, 国家は均質 (unitary) な存在であると考え。つまり国家は, 安全保障を提供したり, 徴税したりと, その機能に大差があるわけではない。しかし, コンストラクティヴィズムによれば, 国家は「社会的 (social)」なアクターでもあると主張する。たとえば, 国家の機能は同じであっても, 国家に主観的側面が備わっており, その国家がたとえば自らのアイデンティティや役割をどのように規定するか, 平和主義か現状打破主義かなどによって, 作り出す社会的関係は必ずしも一義的なものではない。

国益の概念がいかに形成されるかについても相違があげられる。ネオリアリズムが, 国益は構造 (structure) によって規定される, つまり, アナキーという構造によって国家は安全保障や生存を至上の目的とするというように, 国益がいわば国家の外発的要因によって規定されるとしたのに対し, コンストラクティヴィズムでは, 国家と構造との相互関係, あるいは国内での規範構造によって国益が定義される可能性をも示唆している。国益が必ずしも「外発的に与えられたもの (exogenously given)」ではないと, ウェントが論じているように¹¹, コンストラクティヴィズムでは, アイデンティティや国益は所与のものとはいえず, 変化する可能性を秘めている。

さらには, 上記の国益の概念からもわかるように, 国家というユニットと構造との関係がどこまで自由かという論点がある。ミクロ経済学のモデルにしたがったとされるネオリアリズムでは, 国家というユニットは構造 (国際政治の構造, たとえば, 二極化) によって規定される。しかし, コンストラクティヴィズムでは, 国内の文化, アイデンティティが国益の形成に影響を与える可能性をも認めており, こ

の場合にはユニット・レベルでの自発性が、ネオリアリズムよりも高いといえるであろう。

では、このような理念型において、どのような点で歴史研究との接点があるのだろうか。

コンストラクティヴィズムが「構造を社会化する上で『歴史的固有性や蓋然性』」を重視することは既に指摘されており¹²、コンストラクティヴィズムと歴史研究の関係を考えるひとつの手がかりは、「構造」、「社会化」、「歴史的固有性」、「蓋然性」から考えることであろう。

ウェント自ら、構造と歴史を対照させて以下のように論じる。「いかに X という行動が可能なのか」という問題提起は、何が起こりうるかという可能性の問題を扱い、「構造的分析」はまさしくこの可能性を議論の射程とする、これに対し、「なぜ、Y ではなく X という行動が起きたのか」は現実を取り扱い、これは「歴史的」分析が現実を説明する時に用いられる。しかし、可能な行動の範囲を歴史的分析は示すものではない。歴史研究は、実際に起きたある事柄やこれから起きるであろうことに焦点をあてるが、そのようなことが起きることを可能にした要因については問題にはしてはおらず、科学的な説明とはいえない。理論としては、国家がなぜそのような行動をとることが可能であったかという構造を論じる必要がある。『『歴史的』説明と『構造的』説明は認識論的には異なるが、探求上は相互依存的な形態である」とし、「構造的—歴史的 (structural-historical)」分析という用語を用いており、彼の分析において、構造が歴史と相和する可能性を示唆している¹³。

他方、コンストラクティヴィズムの興隆によって、国際関係史への関心が深まるであろうことも指摘されている。国家が普遍的な合理性を追求し、その生存を至上の目的として追求すると考える場合には、歴史の教訓は重要なものと考えられてこなかった。国家の行動は普遍であり不変の要素が強いからである。したがって、アメリカにおける国際関係論もしくは国際政治学の学界では、文化やアイデンティティなど固有性の探求は周辺に追いやられてきたのであった。しかし、冷戦の終焉やグローバリゼーションによって、コンストラクティヴィズムは文化、アイデンティティ、国益、経験の固有性に興味を抱くようになり、これによって歴史への興味が生じるようになった。「もし、思想、規範、実際が重要なのであるならば、そして、それがそれぞれの社会的文脈によって異なるとしたら、逆に歴史が重要となる」のであり、コンストラクティヴィズムを標榜する理論家が歴史研究を多く書いていると指摘されている¹⁴。

さらには、ラギーは、コンストラクティヴィズムとは、国家のアイデンティや国益を問題とし、それらがいかに社会的に構成されたかを示すことだとその特徴をつかんだ上で、分析のスタイルが「帰納的」な方向性を有し、結果として、実証的な研究になることも指摘している。コンストラクティヴィズムの特徴である「社会的に構成された」という要因を探求した結果が帰納的分析になるとするなら、「社会的に構成された」という概念に、普遍性ではなく個別性への広がりを含む要因が存在するということであろうか。

ここまでの議論で示唆されていることをふまえると、「社会的に構成された規範、アイデンティティ、国益」を考察する上では、歴史的探求に似通った分析が行われるのかという問題が提起される。すなわち、ネオリアリストが主張するように、国家の行動や国益はアナキーという構造によって規定されるという議論には、歴史的分析が必要ではないのに対し、国家の社会化を分析する際には、より歴史的、実

証的、帰納的な分析が用いられるかということである。上述の歴史家シュレーダーによる論証にしたがうならば、ネオリアリズムは「非歴史的」、「反歴史的」であり¹⁵、歴史との親和性は低いか存在しないのに対し、コンストラクティヴィズムに歴史との親和性が高いとするならば、それはどのような要因によって説明可能であろうか。

そのような疑問に答える手がかりを与えてくれるのは、理論と歴史においては「時間と場についての恒常性」の概念が異なるとする歴史家ギャディスの説である。ギャディスは、国際政治学においては、「バンドワゴニング」、「抑止」といった諸原則や概念は、時間と場を超えて同じように機能する「恒常性」を前提とするが、歴史家は、あらゆる概念はある「文脈」にはまり込んでいると、主張する。¹⁶ つまり、理論が提示する概念やモデルは、時代や国を問わず常に適応されることが想定されており、この意味では、個別的な文脈は排除される。

では、コンストラクティヴィズムに重要な「社会的に構成された国益やアイデンティティ」という概念には、時間と場を超えた恒常性が同じようにあてはまるのであろうか。まず、第一には、アクター A やアクター B が、社会的に構成された国益を持つというレベルでは、恒常性という基準は適用可能といえる。どの時代、どの国であれ、国益がアイデンティティや規範によって社会的に構成されるというレベルにおいて、時間と場の恒常性はあてはまる。しかし、そのような国益やアイデンティティが形成される過程は恒常的ではなくむしろ蓋然的であり、また国益やアイデンティティの内容は、その時代またはその国によって異なる可能性を有する。すなわち、ギャディスが主張する文脈（歴史）が規定することを認めるものである。

また、国益やアイデンティティが「社会的に構成された」と解釈する場合に、「社会化」は時間の概念を本来含むものだということが重要である。ウェントも、コンストラクティヴィズムの議論では、国益の形成に当たっての「進化的アプローチ (evolutionary process)」がとられると論じており、「時間」の経過を経たものであることを書いている¹⁷。ネオリアリズムにおいて、たとえばパワーの不均等な分配が構造を規定すると前提される場合、この分配は時間軸による分析を必要とするものではなく、どの時代、どの瞬間にも国際関係には不均等な分配が存在することを前提とする。しかし、「社会的に構成される」という概念は本来的に過程を表す概念であり、時間という分析軸を必要とする。つまり、社会化という過程は、時間 A から時間 B への現象であり、時間軸の分析が必要となり、時を隔てた変化を分析する歴史と共通の側面がみられるとあってよいのではないだろうか。

次にコンストラクティヴィズムといっても、その論旨は一枚岩的なものではないことも指摘されている。論者の視点によって幾つかの類型への分類が示唆されているため、類型をさらに限定した上で、検討する必要がある。本稿の議論の上では、幾つかの類型の中で、どの類型が歴史研究と親和性があるか特定して議論するべきであろう。

論者によってもその分類は異なるが、たとえば、ラギーは「新古典的コンストラクティヴィズム」(カッツェンスタイン、ラギー自身、フィネモアなど)、「ポストモダニスト・コンストラクティヴィズム」(アシュリー (Richard Ashley)、デリアン (Der Derian)、「自然主義的 (naturalistic) コンストラクティヴィズム」(ウェント)と分類している。ラギーによれば、これはその学問的基盤と社会科学全体で

の位置付けによる分類である。たとえば、「新古典的コンストラクティヴィズム」は今までの、国際政治学の伝統の延長線上に立つものである。ポストモダニスト・コンストラクティヴィズムは、学問的伝統としては、ニーチェ、フコー、デリダにまで遡り、第3の「自然的」はその間に立つものとする。¹⁸

また、ホブソンは、「国家中心コンストラクティヴィズム」、「国際社会中心コンストラクティヴィズム」、「ラディカル・コンストラクティヴィズム（ポストモダニズム）」に分けている¹⁹。国際社会中心コンストラクティヴィズムは、国家のアイデンティティや国益は国際社会の規範的構造によって規定されると主張されるのに対し、国家中心コンストラクティヴィズムは、アイデンティティや国益の形成に当たって、国内での規範的構造を重視するものである。ラディカル・コンストラクティヴィズムはラギーのポストモダニストに重なるものであり、ウェントをこの範疇に入れる。

筆者のみるところでは、ラギーの分類による「新古典的コンストラクティヴィズム」はホブソンによる「国際社会中心コンストラクティヴィズム」と「国家中心コンストラクティヴィズム」の両者を含む。この範疇に分類されるコンストラクティヴィズムは事例を多く扱っているので、以下この類型に識別されるコンストラクティヴィズムをさらに検討する。

国際社会中心コンストラクティヴィズムによれば国家のアイデンティティや利益は、国際社会の規範的構造によって規定される。たとえば、ユネスコなどの規範性を有する国際機関の行動によって、あるいは、ジュネーヴ条約など国際人道法規の発展によって、国家の行動が規制されることが実証づけられている。国際社会中心コンストラクティヴィズムの研究者として挙げられるのが、フィネモアである。彼女によれば、国家は物質的構造によって社会化されるのではなく、国際社会の規範構造がうみだす社会化の原理によって規制される。²⁰

くわえて、国際社会中心コンストラクティヴィズムにもまして、既存の歴史研究と重なる面が大きいと思われるのは、国家中心コンストラクティヴィズムである。伝統的な外交史が国家を単位として歴史を語り、国家を中心の分析単位としていることから、その接点が認められるからである。

その中でも、中心的存在であるカッツェンスタインの議論を検討してみたい。カッツェンスタインは、日本の戦後安全保障政策を、コンストラクティヴィズムの視点から分析した著作を発表している²¹。日本の安全保障政策をとりあげた理由を、「日本とアメリカがなぜそう異なるのか」という問題意識から説明する。特に、「国家を理論的に考察する面で、国家の機能として警察面、軍事面での考察は役に立つ」から、「国内での秩序維持が対外的にどう反映する」かが重要であると、国内での警察政策などにみられる規範意識から安全保障政策を考察する。さらに、興味深いのは、「歴史をよく取り入れた社会科学は、毎日の出来事が変わり行く中で、より広いパターンを知ること役立つ」と歴史的手法をとることを明言していることである²²。これまでの理論研究と差異が認められるのは、日本という安全保障政策分野では異質とされる事例をとりあげており、国際社会の構造よりも国内での規範構造に着目し、歴史に明白に言及していることであろう。

日本の安全保障を、文化、規範、アイデンティティの点から論じるのは例のないことではあるが、決して、日本のユニークな安全保障政策を、ユニークな文化によって証明しようとしているのではなく、「日本の安全保障政策の固有な面を、制度化された規範という側面から説明し要素する」と、カッツェン

スタインは書く²³。すなわち、「文化」を持ち出すが、決してそれは全般的な文化論的考察に陥るのではなく「制度化された規範」を「社会化」されたものとする、自らの考察における「文化」の範囲を限定する。

カッツェンスタインの議論では、歴史的文脈は重要であり、これは単に実証性を求めるという点のみならず、理論の上からも歴史が重要だということが読取れる。彼の分析においては「制度化された規範」が重要な概念となっているが、なぜ規範は重要であり、しかも日々の政治の動きに左右されずにある程度の永続性があるのかという問いかけに、その理由を「制度」と「歴史」に求める。アクター（国家）は集団的アイデンティティを決める際には「歴史的（イタリック・オリジナル）闘争に深い意味合い」を置くと論じる。つまり、規範の創生は歴史から切り離すことはできないということである。しかも彼は、「制度化された規範は歴史的（筆者注）に創成されたものであるから、本書の視点は、人類学的というよりも歴史学的方法に重なる」と書いており、規範形成に歴史的分析が不可欠なことを書いている。²⁴

きわめて興味深いのは、コンストラクティヴィズムの歴史観は、これまでの理論研究における歴史の扱いとは異なるとカッツェンスタインが明記していることである。

リアリストは歴史を同じことの繰り返しとみなし、リベラリストは歴史に焦点と安定した平衡を探す。そして彼らは、歴史を自分のサンプルに都合の良い事実の集積庫とみなしている。コンストラクティヴィズムによるところの制度主義は異なる。制度主義は、社会科学は蓋然的な一般化をできるのみだと考える、制度主義は変化に、文脈的な歴史主義的な見方を有する。²⁵

つまり、コンストラクティヴィズムにおいては、変化を射程に入れて議論する上で、歴史という文脈が重要であると主張している。

コンストラクティヴィズムの意義について、カッツェンスタインは、2段階のレベルに分けて考えている。第一には日本とドイツの武力行使に否定的という安全保障政策は、リアリズムよりも、リベラリズムよりも、コンストラクティヴィズムでの説明が良いというレベルである。カッツェンスタインはリアリズムとリベラリズムの比較をも持ち出し、リアリズムの説明ならば、日本もドイツも、やがては核武装するであろうという議論が導き出されるが、これに理論の見地から反論する際には、コンストラクティヴィズムが有用だという。

次のレベルでは、同じような規範も異なった結果をもたらすということをどう説明するかということである。つまり、ドイツの場合、国内法制度はテロリズムに対する懸念に備えており、この結果、国際的分野でも他国と協力して反テロの枠組形成に積極的であった。しかも、ドイツは安全保障を政治的、軍事的に定義し、その政策を国際社会とのパートナーシップによって形成してきた。しかし、日本は政治的・経済的に、安全保障を定義し、経済的な見地から安全保障政策を検討してきたのであり、アメリカとの提携関係の強化は長期的にみると経済的国益の見地から考えられてきた。日本とドイツの事例でみるならば、「制度化された規範」が同じように作用するとは限らない。

ドイツと日本との違いを、理論研究家ではないブルマは文化的な要因から説明する²⁶。カッツェン

タインがブルマに言及する部分は説得力を欠くようにも思われる。カッツェンスタインが「制度的規範」を持ち出して、日本の安全保障政策を論じるという次元では、コンストラクティヴィズムは理論としての説明能力を有する。しかし、制度的規範であれ、アイデンティティであれ、その中身を実証的に説明する際には、その変数は定まっていはいない。日本がなぜ戦後、あのような安全保障政策をとってきたかという問いかけに対して、実証研究の立場から、教育制度や集団的記憶などをも含めてブルマは論述するのである。

また、同じように日本とドイツの戦後安全保障政策を、コンストラクティヴィズムが分析した場合、何を持ってきて説明するかは論者の視点によって異なる。カッツェンスタインは「制度化された規範」を分析枠組として前面に出したが、バーガーは歴史的経験とその結果を国内政治が解釈したその結果によって、軍事行使に否定的な信念や価値を作り出したと議論する。1945年から60年までの間に、これらの理念や価値が制度化されて、それが戦後の国民的アイデンティティを形成したとするものである。但し、バーガーが歴史的文脈を重要だとしていることは、カッツェンスタインと同じであり、「政治的—軍事的文化と安全保障政策の進展の双方を時間の経過を追って、これが歴史的経過の中でどのように発展されたかを検討すること」が重要だとしている。²⁷

カッツェンスタインは、『国家安全保障の文化』と題された著作を編集しているが、これには、多くの事例研究論文が含まれている。前述の分類に従うのであるならば、国際社会中心コンストラクティヴィズムの枠組では、「通常兵器の位置、規範、拡散」、「規範と抑止—核兵器、科学兵器のタブー」、「人道的干渉における規範形成」という論文が書かれている。また、国家中心コンストラクティヴィズムでは「文化と第二次世界大戦前のフランス軍事ドクトリン」、「毛沢東中国における文化的現実主義と戦略」、「アイデンティティ、規範、国家安全保障—ソ連の外交政策革命と冷戦の終焉」、「ドイツと日本における規範、アイデンティティ、国家安全保障」、「民主主義共同体の集団的アイデンティティ—NATOのケース」、「中東におけるアイデンティティと同盟」といったテーマが取り上げられている。ここで例示したテーマを見てもわかるように、あるいは、カッツェンスタイン自身が指摘しているように、方法論的にみて「歴史的研究と変わりはない」としていることも見逃されるべきではないであろう²⁸。しかし、これら所収の論文が、ネオリアリズムのような物質的側面から構造を規定する考え、すなわち、国家を一義的なアクターだとする見解ではとらえられない側面を描き出していることも確かである。

このカッツェンスタイン編著作では、アメリカの事例はとりあげられてはいるが、もちろんアメリカにも可能であると、カッツェンスタインはナウやナイに論及している²⁹。「たとえば、ナウにとってまた重要なことは、政府特にアメリカ政府の目的や政策に思想が与えた影響なのである」³⁰。同様のことは、ラギー自身も指摘しており、「ヘゲモニーが問題であるが、アメリカの（イタリック、オリジナル）ヘゲモニーが重要なのである」と書いている³¹。ヘゲモニー一般を対象とするのではなく、アメリカのヘゲモニーを対象に研究を指向するということは、個別性の探求を指向するものであり、このような方向性は既存の理論研究の方向性とは本質的に異なるようにも思われる。ギャディスが指摘した理論と歴史の区別にしたがうならば、このような方向性は理論における「時間と場を問わない恒常性」を否定するからである。アメリカ政府の政策に思想がどのような影響を与えたか、あるいはアメリカのヘゲモニーはど

のようなものか。このような問題は歴史研究者にとっては、頻繁に探求されてきた問いかけである。

国家が社会化するアクターであり、社会化によってアイデンティティや国益を形成するとするならば、社会化には時間軸の考察、したがって歴史的文脈が必要となる。しかもその社会化は結果として固有性の探求につながるがゆえに、コンストラクティヴィズムは、他の理論的枠組にもまして、歴史研究と親和性が高く、「親歴史的 (pro-historical)」といえる。

2. 歴史研究における「ideational」アプローチ

前節で論じてきたように、コンストラクティヴィズムの理論、概念そのものに歴史研究と相和する側面があり、そしてその概念を応用してなされた実証研究に、多分に歴史研究と重なる点があるとするならば、逆に、歴史研究の中に、コンストラクティヴィズム的な問題意識をもってなされた研究はないのか検討することも、理論と歴史の関係を考察する上で役に立つであろう。

コンストラクティヴィズムは歴史研究として、ボーズマンやマクネイルの研究をあげてきているが³²、このようなメタヒストリカルな業績とは別に、歴史研究には、対外態度、イメージといった概念から議論する系譜があることも見逃されてはならない。歴史研究において「ideational」な要因を研究の対象とした系譜をこの節では検討したい。理論としてのコンストラクティヴィズムも、古くはドイチュやハースのイメージ研究が先駆としてあることは認めており、歴史研究でも、後述のディングマンのように、明確に理論を踏まえてイメージや役割意識を論じた研究がある。しかしながら、理論に言及してはいないものもあり、コンストラクティヴィズムの先駆的著作が歴史研究に影響を与えたとは、一概には言えないであろう。

以下、コンストラクティヴィズムと重なる範囲で議論をしている歴史研究をとりあげ検討していくが、決してすべてを網羅できるものでもなく、あくまで筆者の気付く限りにおいてのもので、限定的であることをことわりおく。

1974年に出版された『近代日本の対外態度』という論文集は「対外態度」という概念から日本外交を分析するものである。そのまえがきには以下のような記述がある。「研究の焦点を、個々の対外問題をめぐる意見や外交交渉や対外政策形成過程ではなく、それらを枠づける、多少とも構造化された、したがってある程度持続性のある対外態度におく、ということであった。(中略)われわれは、日本人が国際関係をどのようなシステムとして理解し、そこでの日本の役割をどのように規定してきたかの解明」を基本的課題とする³³。ここに見られるのは、国家とシステムとしての国際関係という構造的な関係性という視点の設定であり、しかも「対外態度」という物質的というよりもむしろ「ideational」な要素によって考察するものとなっている。執筆者の顔ぶれをしてみるならば政治学者も含まれており、狭義の上での歴史学者が書いたものではないからことも、このような明白なフレームワーク設定の理由といえるかもしれない。

上述書所収の佐藤誠三郎の「幕末・明治初期における対外意識の諸類型」は「欧米列強からの脅威に直面した当時の日本人が、新しい国際状況をどのように認識した」かを課題としている。日本が開国を迫られた当時の状況を「戦国乱世」という日本の歴史にみられる概念を応用して認識したと指摘してお

り、しかも国家間には「階統的秩序」があると分析する。戦国乱世モデルは、変容しながらも根強く残存したことを指摘している。³⁴

ディングマンは日本がウィルソンの世界秩序にどのように対応したかを、K・J・ホルスティが提起した「国家の役割概念 (national role conceptions)」という概念から分析している。「K・J・ホルスティによれば、『国家の役割概念』とは『ある国家に適合的な一般的な決定、約束、規則および行動についての、およびその国家が国際体系またはその一部を成す地域体系において持続的な基礎の上に遂行すべき機能についての政策決定者自身の定義』である」としている。³⁵ 現興味深いことに、後にウェントもこのホルスティの論文に言及している。ウェントは、これを当時としては画期的な論文と評価しているが、この対外政策における役割という理論型と国際関係理論型との間に、その後、何ら関係がなかったことを指摘している³⁶。

渡辺昭夫論文は戦前、戦後を通じた日本政府指導者の演説を分析している。戦前においては、「基本的価値（自国の国民としての存在の基礎的条件にかかわるもの）」「手段的価値（自国の生存に必要な手段にかかわるもの）」「関係的価値（自国と国際社会との関係のあり方にかかわるもの）」という三つの価値体系があったと分類し、戦前では関係的価値の領域では「協調」が一貫した価値を占めてきたことを指摘している。戦後は国際的地位向上が大きなウェイトを占めるようになっていく。対外意識の変化を時代を追って検討しているが、連続性をも指摘しており、「国際環境への柔軟な適応性とプラグマティックな漸進主義を特徴とする持続性」としている。³⁷

次に、歴史研究者として入江昭の一連の研究に着目する。筆者には、入江は国際関係史家の中では、比較的早くからまた一貫して、「ideational」な側面から国際関係を歴史的に分析してきたと思われるからである。入江の研究にコンストラクティヴィズムを読みこむ可能性があることは既に指摘されており³⁸、また、カツエンスタインが、自己の分析枠組を提示する際に、他の理論の論文と並んで、入江の実証研究についてではなく「文化とパワー」と題する1979年論文に言及していることから、歴史学者の考察する視点と理論家の枠組の交錯を考える上で妥当性があると思われる³⁹。

まず、1967年に出版されている『太平洋を超えて』は日米中の国際関係史を単に外交面や政府間交渉のみではなく、人々のイメージ、ステレオタイプなども組み込んで、「アメリカ・東アジア関係の内面史」として描いている。「（この本は）太平洋を超えての相互認識、アメリカ、中国、日本の政治に携わる者や知識人が世界や共通の問題を互いにとらえたのか、すなわち、個々の現実をどのように定義付けたかを課題とする」と書いている。⁴⁰

72年に出版された『太平洋の不和』では、世紀転換期から20世紀の初頭にかけて、日米がいかに対立的な関係を形成して行ったかを描いている。中心的課題は、アメリカの帝国主義をアジアにおける要因を入れて語り、日本の拡張主義にアメリカの要因が果たした役割を検証することだとする。ここでも、日米双方の拡張主義の中で、「idea」が重要であったことが指摘され、「ナショナリズムと普遍主義が微妙に交じり合って、アメリカ人は世界でもっとも進歩的な国民だという見方が広まった」と論じる。経済的な数値からみるならば、中国との貿易量は低かったが中国への期待は高く、「その理由の根底には、中国へのイメージとアメリカがアジアですべきことのビジョンがあり、それは経済的であると同時に文

化的道義的なものであった」とする。また、日本では、人口過剰だという意識が対外膨張につながっており、日露戦争後には、日本において「世界の中の日本」という自意識が芽生えたこともその後の帝国主義的政策に影響を与えたと論じる。⁴¹

『日米関係のイメージ』は入江が編集したものである。この英文版序文は1975年に出版されたことから、当時書かれたものと思われるが、入江は其中で、アメリカ外交史研究の中で「啓発的著作」のいくつかはイメージ分析であったと指摘している。そして、ビアードの『国益の思想』(1934年)、ワインバーグの『明白な運命』(1935年)などの戦前の著作をあげ、「これらの本はすべて、世界諸問題に対応する際のアメリカ国民の基本的仮説を非常に詳細に吟味しようとした」と指摘している。「国家が現状に到った過程を理解するため、これらの著者たちは思想の研究へとむかった。すなわち、国民が国外の世界と自己とを関連付ける際にどのような心構え、姿勢が彼らの特徴であったかを吟味しようとしたのである」。このような「アメリカ人に特有な国際関係の見方の研究」は戦後もつづき、モーゲンソーやケナンは、アメリカ外交の流れには国益を理性的に判断しない理想的指向があることに批判的であったと指摘する。さらにはウィリアムズやコルコの修正主義的歴史家も「経済拡張主義と例外的自由主義の伝統がアメリカ人の外国を見る際の知的環境をかたちづかった」と指摘する⁴²。

さらに、日本にも、イメージ研究の業績があり、橋川文三、松本三之助らの思想史的研究があること、また、日本人のイメージ研究には中国古典と西洋思想の理解が必要とされることから、比較文学の研究によって多くの研究が成されていることをも指摘している。以上のような、入江の叙述に従えば、同書出版の1975年以前にも歴史研究の中には、イメージを扱った研究が存在したということである⁴³。

このような見方をふまえて、入江は国際関係を「文化とパワー」とみなす考え方をさらに発展させて行く。それが、1978年12月にアメリカ外交史学会の会長演説でなされた演説の「文化とパワー—文化間関係としての国際関係」である。この論文で、入江は、国家がそれぞれ持つ伝統、社会性、知的傾向、政治的取り決めという「システム内での行動」と「システム外での行動」に分けて考える。すなわち、国家の対外的行動を理解するには、その国家が持つ「文化システム」を考察しなければならないと主張する。「アメリカの外交を理解するためには、アメリカの文化を理解しなくてはならない」、「内的思考と対外的行動にどのような関係があるか」と書く⁴⁴。入江は、理論研究家ではないが、「システム内」、「システム外」といった概念設定は、入江が国際関係を平板に過去からのつながりとして単線的な歴史理解で語っているわけでもないことを示している。国家と国際関係システムといった理論枠組に頻繁に用いられる構造的理解がみられるのである。

国際関係を文化とパワーの両面から考察すべきであるという問題点はさらに、『パワーと文化—日米戦争1941-45年』に表れている。「パワー」とは軍事力、戦略、戦争遂行能力、政治システムであり、さらにはより不明瞭な要素としての「グローバルバランスや他国の意図の認識である」とする。また、国家は共通の意識によって結ばれているので文化的存在であり、文化の中身は、宗教、芸術、文化的要素、習慣や生活様式、そしてシンボルであるとする。さらには、「国際関係の研究は三つのカテゴリーでなされなければならない。パワーレベルでの関係、文化的交流、そしてパワーレベルと文化レベルがどのように関係するか」と論じ、国家間関係を文化とパワーという別の次元でとらえる切り口を提示す

る⁴⁵。現在のコンストラクティヴィズムの議論では、他国の意図やグローバルバランスの「認識」は「ideational」な要因と定義されるので、これらをパワーとして議論している点では、入江はコンストラクティヴィズムの定義付けからはやや外れている。

入江の最近の二作には、国家を相対化するという問題意識がみられる。国家を相対化する、あるいは国家間関係ではない国際関係を考えるという点で、「文化」が重要な作用をするのであり、この場合の文化はすぐれて「ideational」である。『権力政治を超えて』は文化を扱っているが、文化をパワーと切り離して論じており、「理念、願望、感性等は権力政治的な諸要因と同じく、ある世界を『創生』するが、これら二つの世界は相等しいものではない」とする。興味深いのは、入江が国家と世界を結びつける方策として文化をとらえようとしたことである。「本書において提起したことは、一国の状況を世界の動きに結びつける一つの方策として、国際関係に文化的定義を取り入れる可能性を探求することであった」⁴⁶。入江の理論は精緻なものではないが、ここでも、「一国」「世界」、そしてそれを結ぶ文化という3要因から組み立てる構造的理解がなされている。ウェントは、国際政治の構造と主体である国家をつなぐのはアイデンティティであるという議論をしていることから⁴⁷、基本的視点の設定において入江と重なる部分がないともいえない。

また、最新作『グローバルコミュニティ』において、グローバルコミュニティの形成を「現実と理念」の双方から追いかけており、規範意識がどのように形成されて、現実反映されていくかを描いている。この著作でも、認識は重要な基底枠組となっており、「まず、政府間国際組織にせよ、NGOにせよ、これらの組織が出現するためには、確たる認識が出発点であるということを考えてみたい。すなわち、諸国家や諸国民は国境を超えて利益や目標を共有するのだという確信であり、また、直面する多くの諸問題を解決するためには、個々の国家が単独で行動するよりも、それぞれに備わる叡智を結集し脱国家的な協調行動をとるのが最善であるという確信である」と記す⁴⁸。この著作の焦点は、NGOの歴史的叙述であるが、その根底には意識の面で、国家を超える世界の創生がおこなわれていたとことにも着目するものである。このように、この著作を、国際社会における規範意識が、どのように国際関係を変質させていったかという視点に位置付けるならば、「国際社会中心コンストラクティヴィズム」の文脈に連なるものと解釈できると思われる。

入江がこのような「ideational」な側面を重視する歴史研究者であることは、筆者の記憶する限りで、彼が学生に推薦した多くの著作が、思想、対外観、文化などを扱った歴史書であることから理解できる。たとえば、メイの『インペリアルデモクラシー』⁴⁹、ディギンズ『ムッソリーニとアメリカ』⁵⁰、デヴァイン『第二のチャンス』⁵¹などが読むべき著作であった。彼が入江学派といったほどのものを作り上げたかはわからないが、入江に直接教えを受けた歴史家にニンコヴィッチがいる。理論研究者ラギーは、コンストラクティヴィズムについて論じる際に、このニンコヴィッチのドミノ理論を研究した著作に触れて、国家が現実を「構成」と論じており⁵²、ニンコヴィッチの著作にコンストラクティヴィズムの実証例を読みこんでいる。

また、理論家フィネモアはコンストラクティヴィズムを実証面から弁護して、「実証研究が繰り返し論じているように、世界において人々が良いと判断したことや『こうあるべき』としたことが、政治的現

実になってきている」⁵³と、規範の形成について論じている。これは、拙著『戦争の法から平和の法へ』⁵⁴で、筆者が探求した課題にも通じると感じる。筆者は、戦争を違法化すべきという認識が世界に広まり、それが条約、国家実行に制度化されていく過程を歴史的にとらえ、戦争に関する国益の定義は、戦間期においては日米で異なっていたと論じた。戦間期の国際関係の構造がアナキーであるとしても、そのような構造が、アメリカと日本の国家行動を同じように規定したわけではなく、この時期の日米の戦争についての政策をみるならば、ネオリアリズムではなく、コンストラクティヴィズムが妥当する。

最近の歴史研究とコンストラクティヴィズムの著作は、距離が縮まっていると思われる。歴史研究分野でのスミスの研究は、「アメリカが世界での役割についてどのようなアイデンティティを有しているか」を探求し、そのアイデンティティには、民主主義を世界に広めていくという意識があったとしている。このようなアメリカの国際主義をリアリストが拒絶したことによって、国際関係の理解が妨げられたともしている⁵⁵。

同じような問題提起に理論家ナウが取り組んでおり、アメリカのヨーロッパとは異なる「セルフイメージ」がアメリカの外交政策に影響を与えたと主張する。セルフイメージとはアイデンティティでもあり、「アメリカのアイデンティティがアメリカのパワーと同じ位アメリカの外交政策を規定してきた」と論じ、具体的には、「正当な政府、選挙、よい指導者、普通選挙権」などに体现される民主主義であるとする。⁵⁶

この説でみてきたように、歴史研究においてコンストラクティヴィズムと同じような問題意識や視点を有した実績があったことは確かである。外交史であれ、国際関係史であれ、国家がなぜ行動するかという問題意識は根底では共有しており、歴史家は歴史的な文脈の中から「ideational」な要因を視点にいれて研究をおこなってきたのである。このように多くの歴史研究が、コンストラクティヴィズムと重なる視点から研究をしてきたことから、コンストラクティヴィズムは「親歴史的」といえる。

おわりに

コンストラクティヴィズムの評価を以下のように、ある学者は書いている。「国際関係における社会的なペイオフはそれゆえ、単に、状況説明的 (incremental) (すなわち、他ではできないようなより詳細な歴史的説明) におわるのではない。このようなアプローチは、さもなくば見落とされがちな結果的変数やプロセス (consequential variables and process) に学者の関心を向けた」⁵⁷。確かに、コンストラクティヴィズムは、ネオリアリズムやネオリベリズムが語れなかった要因を語っており、アイデンティティや文化が国家の行動を説明する上では、物質的な要因に加え重要なことを、理論の分野で説明付けたのである。そのような視点は、理論研究の上では新しいといえるかもしれないが、実証する過程においては、方法論的には歴史研究と質的に変わるものではなく、またこれまでの歴史研究の中に同じような問題意識をもって国際関係を歴史的に議論した研究がなかったわけではない。これまでの理論よりも、歴史的な文脈を重視する点で「親歴史的」であり、結果として実証過程においては個別性の論証に入りこむ点においては、理論には「時代や場所を超えた恒常性」が必要とされるギャデイスの説に照らして考えると、これまでの理論とは異なる性質を有するものである。

他方、理論において、アイデンティティ、思想、文化が議論の射程とされ、国際政治学の理論上、重要な要因だと認められたということは、歴史研究にとっては、むしろ喜ばしいことといえる。これまで、歴史家がアイデンティティやイメージを議論しても、それは歴史研究の議論であって、理論的な位置付けを得られていなかったため、国際政治学上、妥当な議論と認められてなかったのである。戦後アメリカにおいては、国際政治学（理論研究）は政治学の下位領域とされてきており、他方、歴史学や法学その他の関連領域を含めて国際関係学を包括的にとらえるイギリスとは対照的であるという指摘もなされているが⁵⁸、コンストラクティヴィズムの興隆は、アメリカにおいて、歴史研究と理論研究の接近の可能性をも秘めるものである。加えて、アメリカにおいて外交史という学問分野が、歴史学全体の領域では周辺に追いやられていく傾向がある⁵⁹とするならば、この歴史研究と理論研究の接点を見出す可能性は、歴史研究にも意味は大きいといえる。

注

- 1 石田淳「コンストラクティヴィズムの存在論とその分析射程」『国際政治』124号（2000年5月）11-26頁、信夫隆司『国際政治理論の系譜－ウォルツ、コヘイン、ウェントを中心として』（信山社、2004年）など。
- 2 たとえば、Robert Jervis, "Realism in the Study of World Politics," in Peter J. Katzenstein, Robert O. Keohane, and Stephen D. Krasner, eds., *Exploration and Contestation in the Study of World Politics* (Cambridge: MIT Press, 1999), pp. 339-40. Hereafter, this book is cited as Katzenstein (1999).
- 3 Colin Elman and Miram Fendius Elman, "Diplomatic History and International Relations Theory: Respecting Difference and Crossing Boundaries," pp. 5-21; Jack S. Levy, "Too Important to Leave to the Other: History and Political Science in the Study of International Relations," pp. 22-33; Stephen H. Haber, David M. Kennedy, and Stephen D. Krasner, "Brothers under the Skin: Diplomatic History and International Relations," pp. 34-43; Alexander L. George, "Knowledge for Statecraft: The Challenge for Political Science and History," pp. 44-52; Edeard Ingram, "The Wonderland of the Political Scientist," pp. 53-63; Paul W. Schroeder, "History and International Relations Theory: Not Use or Abuse, but Fit or Misfit," pp. 64-74; John Lewis Gaddis, "History, Theory and Common Ground," pp. 75-85, *International Security*, Vol. 22, No. 1 (Summer, 1997).
- 4 Ole R. Holsti, "Theories of International Relations," eds., Michael J. Hogan, Thomas G. Paterson, *Explaining the History of American Foreign Relations*, second edition (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), p. 89.
- 5 Schroeder, "Historical Reality vs. Neo-realist Theory," *International Security*, Vol. 19, No. 1 (Summer (1994), p. 148.
- 6 Stephen H. Haber, David M. Kennedy, and Stephen D. Krasner, "Brothers under the Skin: Diplomatic History and International Relations," p. 36.
- 7 See Jervis, "Realism in the Study of World Politics," pp. 332-51.
- 8 たとえば、以下の国際政治理論の教科書では、コンストラクティヴィズムは「方法論上の論争」という章の中で扱われている。Robert Jackson, Georg Sorensen, *Introduction to International Relations: Theories and Approaches*, second edition, (Oxford: Oxford University Press, 2003), pp. 247-66.
- 9 Ideationalという言葉は、コンストラクティヴィズムにおいて、その本質を表す重要な概念であり、「価値、思想、認識などを重視する」といった意味合いである。しかし、日本語での定訳は未だ存在しないようなので、本稿ではこのまま「ideational」と表記する。この点について、東京大学の石田淳氏にご教示賜った。記して感謝する。
- 10 Alexander Wendt, "Identity and Structural Change in International Politics," in eds., Yosef Lapid, Frierich Kratochwil, *The Return of Culture and Identity in IR Theory* (Boulder: Lynne Rienner Publishers, 1996), pp. 48-50.
- 11 Wendt, "Anarchy is What States Make of It: The Social Construction of Power Politics, *International Organization*, Vol. 46, No. 2 (Spring 1992): p. 423.
- 12 See Donald J. Puchala, *Theory and History in International Relations* (New York: Routledge, 2003), p. 7.

- 13 Wendt, "The agent-structure problem in international relations," *International Organization*, Vol. 41, No. 3 (Summer 1987): pp. 362-65, footnote 75, p. 323.
- 14 Christian Reus-Smit, "Constructivism," in Scott Burchill et al eds., *Theory of International Relations*, 2nd edition, (New York: Palgrave, 2001), p. 226.
- 15 Schroeder, "Historical Reality vs. Neo-realist Theory," p. 148.
- 16 Gaddis, "History, Theory and Common Ground," p. 80.
- 17 Wendt, "The agent-structure," p. 319.
- 18 John Gerard Ruggie, "What Makes the World Hang Together? Neo-Utilitarianism and the Social Constructivist Challenge," in Katzenstein (1999), pp. 240-42.
- 19 John M. Hobson, *The State and International Relations* (Cambridge: Cambridge University Press, 2000), pp. 149-72.
- 20 See Martha Finnemore and Kathryn Sikkink, "International Norm Dynamics and Political Change," in Katzenstein, (1999), pp. 247-77.
- 21 Katzenstein, *Cultural Norms and National Security: Police and Military in Postwar Japan* (Cornell: Cornell University Press, 1996). Hereafter this book is cited as Katzenstein (1996a).
- 22 Ibid., pp. 5-7.
- 23 Ibid., p. 17.
- 24 Ibid., p. 22.
- 25 Ibid., footnote 6, p. 212.
- 26 Katzenstein (1996a), p. 189. Ian Buruma, *The Wages of Guilt: Memories of War in Germany and Japan* (New York: Farrar, Straus & Giroux, 1994).
- 27 Thomas U. Berger, "Norms, Identity, and National Security in Germany and Japan," in Katzenstein ed., *The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics* (New York: Columbia University Press, 1996), p. 318. Hereafter this book is cited as Katzenstein (1996b).
- 28 Ibid., p. 509.
- 29 Henry R. Nau, *The Myth of American Decline: Leading the World Economy in the 1990s* (New York: Oxford University Press, 1990)
- 30 Katzenstein (1996b), p. 504.
- 31 Ruggie, p. 223.
- 32 See Puchara, p. 33. 大庭三枝「国際関係論におけるアイデンティティ」, 『国際政治』 124 号 (2000 年 5 月), 159 頁参照。Adda Bozeman, *Politics and Culture in International History* (New Brunswick, N. J.: Transaction Press, 1994); William H. McNeill, *The Rise of the West* (Chicago: University of Chicago Press, 1963).
- 33 佐藤誠三郎, R・ディンクマン編『近代日本の対外態度』(東京大学, 1974 年) 1-2 頁。
- 34 佐藤誠三郎「幕末・明治初期における対外意識の諸類型」同上 1-34 頁。
- 35 ロジャー・ディンクマン「日本とウィルソンの世界秩序」同上 93-122 頁。K. J. Holsti, "National Role Conceptions in the Study of Foreign Policy," *International Studies Quarterly*, 14 (September 1970), pp. 245-46, 306.
- 36 Wendt, *Social Theory of International Politics*, (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), p. 227.
- 37 渡辺昭夫「対外意識における『戦前』と『戦後』」前掲佐藤編, 225-74 頁。
- 38 芝崎厚士「国際文化論における二つの文化」『国際政治』 129 号 (2002 年 2 月), 50 頁。同論文は、入江の研究の中で、文化の要因を時系列を追って分析している。本稿では、芝崎論文よりも古くからの研究業績を「イメージ」に焦点をあてて考察する。
- 39 ここでカツェンスタインが引証している論文は、下記の 4 点である。John Meyer, "The World Polity and the Authority of the Nation-State," in George W. Thomas, John W. Meyer, Francisco O. Ramirez, and John Boli, *Institutional Structure: Constituting State, Society, and the Individual* (Newbury Park, California: Sage, 1997), pp. 41-70; Ron Jepperson, Alexander Wendt, and Peter Katzenstein, "Norms, Identity and Culture in National Security," in Peter Katzenstein (1996b), pp. 33-75; Akira Iriye, "Culture and Power: International Relations as Intercultural Relations," *Diplomatic History* 3, 2(Spring): pp. 115-28; "Culture," *Journal of American History* 77, 1(June): pp. 99-107. 入江の論文が並んで引証されている点が、本論文の趣旨からは、興味深い。Katzenstein (1996a), p. 214.
- 40 Akira Iriye, *Across the Pacific: An Inner History of American-East Asian Relations* (New York: HBJ Book, 1967), xvi.
- 41 Iriye, *Pacific Estrangement: Japanese and American Expansion, 1897-1911* (Cambridge: Harvard Univer-

- sity Press, 1972), pp. 5, 225.
- 42 Iriye, *Mutual Images: Essays in American-Japanese Relations* (Cambridge: Harvard University Press, 1975). 加藤秀俊, 亀井俊介編『日本とアメリカ相手国のイメージ研究』(日本学術振興会, 1991年) 2-10頁。
- 43 前掲書。
- 44 Iriye, "Culture and Power," pp. 115-16, 121
- 45 Iriye, *Power and Culture: The Japanese-American War 1941-1945* (Cambridge: Harvard University Press, 1981), vii.
- 46 入江昭『権力政治を超えて—文化国際主義と世界秩序』(岩波書店, 1998年) 226-28頁。
- 47 See Wendt, "Identity and Structural Change in International Politics."
- 48 Iriye, *Global Community*(Berkeley: University of California Press, 2002), p. 9.
- 49 Ernest R. May, *Imperial Democracy: The Emergence of America as a Great Power* (New York: Harper & Row, 1961).
- 50 John P. Diggins, *Mussolini and Fascism: The View from America* (Princeton: Princeton University Press, 1972).
- 51 Robert A. Divine, *Second Chance: The Triumph of Internationalism in America During World War II* (New York: Anthenuem, 1967).
- 52 Ruggie, p. 237. Frank Ninkovich, *Modernity and Power: A History of the Domino Theory in the Twentieth Century* (Chicago: University of Chicago Press, 1994).
- 53 Martha Finnemore and Kathryn Sikkink, "International Norm Dynamics and Political Change," p. 276.
- 54 篠原初枝『戦争の法から平和の法へ』(東京大学出版会, 2003年)。
- 55 Tony Smith, *America's Mission: The United States and the Worldwide Struggle for Democracy in the Twentieth Century* (Princeton: Princeton University Press, 1994), pp. 3, 355
- 56 Henry Nau, *At Home Abroad: Identity and Power in American Foreign Policy* (Ithaca: Cornell University Press, 2002), p. 60.
- 57 Paul Kowert and Jeffery Legro, "Norms, Identity, and Their Limits," in Katzenstein (1996b), p.496.
- 58 Ole Waiver, "The Sociology of a Not So International Discipline: American and European Developments in International Relations," Katzenstein (1999), pp. 69-75.
- 59 Stephen H. Haber, David M. Kennedy, and Stephen D. Krasner, "Brothers under the Skin: Diplomatic History and International Relations," pp. 40-43.